

～イギリスで開催された「RNCM FESTIVAL OF BRASS」を視察して～

洗足学園音楽大学ブリティッシュ・ブラス講師 原進

去る1月24日～2月2日にかけてブリティッシュ・ブラスの山本武雄教授、福田昌範、原進（筆者）の両講師、助教の滝澤尚哉氏の4名で「RNCM ブラス・オブ・フェスティバル」を視察するため渡英してきました。



RNCM とは、このフェスティバルの会場となっている

「ROYAL NORTHERN COLLEGE OF MUSIC」の略です。このフェスティバルは、英国中から多数の指揮・指導者や作曲家が会場を訪れ、それぞれとの交流や意見交換を交わすことを目的とした催しです。フェスティバル期間中、大学のホールやシアターでは各ブラスバンドによる新作披露演奏が開催されるほか、ロビーなどでは楽器メーカーによるブースが設けられ、楽譜・CD 販売や楽器の試奏なども可能で、ブラスバンド全体の情報を得る事ができるように運営されています。

フェスティバル直前、私たちは会場があるマンチェスターに入る前にウェールズのカーディフへ飛び、ヨーロッパ選手権 3 連覇を達成し世界中のブラスバンドファンから注目を集めている「コーリーバンド」と「王立ウェールズ音楽演劇大学」の視察も行なってきました。この視察が実現したのは、洗足学園ブリティッシュ・ブラスでも指揮者としてお世話になっている R.Childs 先生のご配慮によるもので、先生が指揮者を務めているコーリーバンドではリハーサルを視察させていただき、練習の雰囲気を生で感じられたとともに多くのメンバーと交流を持つことができました。また、コーリーバンドの本番では、山本先生がご紹介され、ご自身がアレンジされた『赤とんぼ』



を指揮するというサプライズ演出がありました。山本先生の歌心がバンドに乗り移り、美しいサウンドとともに会場中に響きわたっていました。本番終了後、聴きに來ていた方々から「とても感動した！」との声が多く寄せられていました。

その翌日、Childs 先生が講師を務められている王立ウェールズ音楽演劇大学では、校内の各施設を視察させていただいた後に、音楽科長の J.Cranmer 氏、弦楽科教授の安良岡ゆう氏、アルトホルン講師の O.Farr 氏らをはじめとした多くの学校関係者が昼食会に我々をご招待くださり、交流に限らず学校の現状や方針などについて様々な意見を交わす事ができました。また、Childs 先生が指揮する同大学のブラスバンドの授業も視察させていただきましたが、その中で私にとって嬉しいサプライズが訪れました！バンドは「ランチタイムコンサート」に向けての練習でしたが、E.ボール作曲の交響詩「復活」の音出し後、山本先生と Childs 先生から、「次はあなたが指揮してみなさい」との指示を私が受けたのです。この曲は昨年の洗足学園ブリティッシュ・ブラスの演奏会で取り上げた曲で、イギリ

スのバンドマンたちに今でも愛され各地で頻繁に演奏されている名曲です。洗足学園の演奏会に向けて私が担当していた曲という経緯もありチャンスをいただきました。与えられた時間は30分……。サプライズということで私の緊張はマックスとなり、恥ずかしながら足はガクガクと震えていました。が！指揮を始めると何ともソフトで奥行きのある音が生まれ、その音に私は体全体を包まれているようなとても心地よい響きに感動しました。そう！正真正銘の“本場のブリティッシュサウンド”でした。Pなのに音が前からだけではなく、後ろからも体を覆ってくるような感覚は初めての体験でした。学生のみなさんも私の手の動きに対して敏感に反応してくださり、言葉は通じなくても会話ができることを改めて感じました。30分という短い時間ではありましたが、「いつかはイギリスのバンドを指揮してみたい！」という私の夢が叶ったと同時に、とても貴重な経験をさせていただきました。

このほか、カーディフでの滞在中は Childs 先生の自宅に宿泊させていただき、何から何までお世話になってしまいました。Childs 先生ご家族の温かいおもてなしに心から感謝いたします。



その後、カーディフから列車に揺られ約3時間……。いよいよマンチェスター入りです。先に向かったのは R.Childs 先生の弟、N.Childs 氏が指揮者を務める「ブラックダイクバンド」のリハーサル会場。翌日に今回のフェスティバルの本番に向けてのリハーサルを視察させていただきました。ややピリピリした空気の中で進められていましたが、指揮者の的確な指摘の下、演奏のクオリティーが上がり、翌日への期待が高まっていきました。また、練習終了間際には山本先生がご紹介され、先生にコラールを指揮していただくサプライズの歓迎を受けたほか、バンドから我々に対しても記念品が授与されました。

翌日からフェスティバルがスタートし、期間中に演奏会やマスタークラスのセミナーが開催され、多くの聴衆がそれぞれを興味深く聴き入っていました。各演奏会のプログラム及び感想は別紙参照にさせていただきます。

会場ではこのフェスティバルの企画者 P.Hindmarsh 氏、RNCM 学長の J.Stockdale 氏をはじめ、作曲家の E.Gregson、P.Sperke、P.Wilby、P.Harper、P.L-Cooper、指揮者の R.Evance、J.Gourly、F.Renton 氏らと交流し、名刺交換や洗足ブリティッシュ・プラスの記録 DVD をお渡しすることができました。また、N.Childs 氏が指揮している RNCM プラスバンドのリハーサル視察をした後、同大学の副学長、L.Merrick 氏や、元フィリップジョーンズブラサンサンブルでトランペット奏者も務めていた J.Miller 教授とも昼食をご一緒させていただき、今後、双方の大学で生徒や教員の交換留学、または短期間の滞在による交流・研修を実施してみてもどうかなど、様々な意見が交わされ、今後に向けて前向きかつ積極的な関係を構築する事ができました。他に、Miller 教授は今年前半に来日予定があり、期間中に本学内でのマスタークラス開講に関しても高い関心を示されていました。

今回のツアーを通して感じたことですが、RNCM 視察中に会場のあらゆる場面で、山本先生が「彼は日本のハリー・モーティマー」と紹介されていたのが特に印象的でした。モーティマー氏はオーケストラのトランペット奏者でしたが、当時のイギリス社会の中で程度が低いとみなされていたブラスバンドを社会に認知させると同時に発展させようと、自身で指導・研究に積極的に取り組み、今日のイギリスではブラスバンドの神様として伝えられている人物です。

私は今回の視察を通して、山本先生が日本のブラスバンドの発展のためにこれまで尽くしてこられた実績を改めて強く感じるとともに、次世代の我々に課せられた役割やブラスバンドの更なる発展のための貢献と責務を実感しました。

その為の取り組みの一つとして、「ユース・バンド」の設立が大きな鍵になるのではないかと思います。例えば、スポーツの世界ではそれぞれの街にジュニアチームが存在し、大人やプロ選手がそこに出向き子どもを育て、そこからプロチーム（社会チーム）に至るまでの「縦の繋がり」を構築する事で社会の中にスポーツが広く認知されています。少子化が進む中で音楽の世界でもそのような流れを徐々に構築していかなければ、ブラスバンドに限らず、吹奏楽やオーケストラでも、更なる発展どころか運営が困難な状況が起こるかもしれません。ユース・バンドの実現に向けては多方面での理解・協力が不可欠であるため容易なことではありませんが、私も山本先生の意志を継ぐ者の一人として今後取り組んでいきたいと感じています。子どもから大人まで一緒に演奏できる環境が整ったバンドが増えることこそが、音楽全体の繁栄・存続に向けての道筋ではないかと思います。また、できるだけ多くの学生に若いうちから海外の文化を少しでも多く知ってもらうために、そのきっかけとして海外の大学との交流などを積極的に進め、演奏技術の向上に限らず、より大きく豊かな人間創りを目的とした新たな取り組みも大学側で進めていくべきではないかと感じました。

現在の自分と今後の方向性について大きなヒントを得られた有意義な研修ツアーとなりました。

最後になりましたが、今回の私たちのツアーに対し快くお迎えくださった方々、そして同じ旅人として多方面に対してのアポイントメントや、旅に関しての段取りをすべて請け負っていただいた滝澤尚哉氏に対し心から感謝の意を送り、研修旅行の報告とさせていただきます。

～演奏会レポート～

フェスティバル期間中に開かれた以下の演奏会を聴かせていただきました。演奏会では新作披露を行なう他、今回は作曲家 D.Bourgeois 氏の70歳を記念し、全ての団体が彼の作品を取り上げています。

演奏会のプログラムと、簡単ではありますが私の個人的な感想をご紹介します。

Caracas Brass

Enrique Crespo Spirit of Brass
J S Bach Arioso aus Kantate BWV 156
Antonio Vivaldi (arr Castro) Allegro from
Concerto in D major
Giuseppe Verdi (arr Riobueno) Nabucco
Enrique Crespo Ein Deutsches Lied
Juan J Colomer Fierabrass
Enrique Crespo Fogo da Mulata
Enrique Crespo El Pasodoble y Olé

This ten-piece brass group from the ranks of the Venezuelan Brass Ensemble opens the weekend's events with an exciting programme to whet the appetite for what's in store later in the Festival.

とても豪華なサウンドが印象的で、音が出た瞬間に鳥肌が立ちました。音楽の創りもアカデミックで最後まで楽しませていただきました。

会場がとてもデッドだったため、せっかくのサウンドが生かしきれないのが少々残念でしたが、二日後の本公演を期待させる好演でした。

Black Dyke Band

Paul Lovatt-Cooper Starburst and Canyons
(world première)
Arthur Butterworth Concerto alla Veneziana
Philip Wilby Red Priest
Derek Bourgeois Blitz
Andrew Ford The Rising (world première)
William Walton (arr Watson) Suite from
Richard III
Nicholas Childs conductor
Richard Marshall cornet
Barrie Rutter narrator

明るく華やかで奥行きのある深い響きはやはりこのバンド独特の持ち味だと思います。指揮者の N.Childs 氏のエネルギーに満ち溢れた音楽作りも魅力的で、指揮者とバンドの一体感はとても素晴らしいものを感じます。

メンバーが少々入れ替わったようで、ちょっとした過渡期といった印象もありましたが、良い音楽を聴かせていただきました。

Leyland Band

Simon Dobson Lock Horns/Rage On
Derek Bourgeois The Forest of Dean
Simon Dobson "...and when the river told..."
Peter Meechan Macbeth
Philip Harper The Witch of the
Westmorelands
Lucy Pankhurst Midnight
Gustav Holst A Moorside Suite
Philip Harper conductor
Philippe Schwartz euphonium

プログラム最後に演奏した「ムーアサイド組曲」は今回のツアーの中で最も心に残る名演でした。バンドの表現力が素晴らしいのはもちろんですが、他の作品とは明らかに何かが違う音楽の魅力は作者 G.Holst のオーケストレーションの素晴らしさを改めて納得させられるものでした。自分もこの作品を昨年演奏したばかりでしたが、近いうちに再び演奏したい気持ちになりました。

Cory Band

Arthur Butterworth Caliban Op 50
Derek Bourgeois Trombone Concerto Op 114a
John Pickard Men of Stone
Arthur Bliss Kenilworth
Peter Meechan Sparta
Philip Sparke A Tale As Yet Untold

Robert Childs conductor
Christopher Thomas trombone
David Childs euphonium

ヨーロッパ選手権 3 連覇を達成し、今最も勢いのあるバンドと言えるでしょう。

重厚で包容力がある温かいサウンドは聴いていてとても心地よい上、自分たちが創りたい音楽を堂々と主張されていました。色彩感も豊かな上、音楽も立体的で最後まで演奏に聴き入ってしまいました。

Foden's Band

William Alwyn The Moor of Venice
Andy Scott Euphonium Concerto (world premiere)
Derek Bourgeois Diversions
Philip Sparke Sea Pictures
Peter Meechan Epitaph for Hillsborough
Percy Fletcher An Epic Symphony

James Gourlay, Michael Fowles conductors
Glyn Williams euphonium

Supported by The William Alwyn Foundation

ここ数年こちらのバンドも毎年聴かせていただいておりますが、バンドから発信されてくる音楽への情熱にはとても魅力を感じていて好きなバンドの一つです。

バンドのメンバーとして活躍されている日本人女性お二人もとても輝いて見えました。今後もぜひ応援させていただきたいバンドです。

Cornwall and Gwent County Youth Bands

Edward Gregson Patterns
Simon Dobson Penlee
Derek Bourgeois Barchester Suite
Paul Patterson Countdown
Philip Harper Kindgom of Dragons

Robert Childs conductor

11～21歳までの年齢で構成されているユースバンドです。楽器を始めたばかりの初心者もメンバーとして多く入っているようでしたが、この中から未来のスターが誕生するかもしれないと思いながら聴いているとワクワクしてしまいました。こどもの城ユースバンド出身の自分も昔を思い出して懐かしい気持ちになりました。

RNCM Brass Band and Brass Ensemble

Paul McGhee Clapp
Gavin Higgins Tango
Martin Dalby Music for a Brass Band
Benjamin Tubb Blizzard (world premiere)
Arvo Pärt Arbos
Elizabeth Winter Circles of Fire (world premiere)
Gary Carpenter Kindness for Ever Mair
Derek Bourgeois Concerto Grosso

Nicholas Childs, John Miller conductors
Mark Harrison trumpet

大学生らしい明るく元気の良いサウンドが印象的でした。ややソリスティックな感じの音が多く、アンサンブルがバラけてしまう事もありましたが、N.Childs 先生の指揮の下、全体的によくまとめられていました。

Venezuelan Brass Ensemble

Giancarlo Castro Gran Fanfaria
Modest Mussorgsky (arr Howarth) Pictures at an Exhibition
Zequinha Abreu Tico Tico no Fubã
Leonard Bernstein Symphonic Dances from West Side Story

Thomas Clamor conductor
Tomas Medina trumpet

Dedicated to the memory of Philip Jones.

The Venezuelan Brass Ensemble visit is supported by Dr Ursula Jones and The Eric and Margaret Kinder Charitable Trust

RNCM in association with 

生のコンサートでこんなに感動したのはもしかして初めてかもしれません。個々の技術はもちろんですが、指揮者による音楽の創りがとても緻密で、第I部の「展覧会の絵」ではこの場にはいないファゴットやオルガンをはじめ、あらゆる楽器の音色が聴こえてくるほどバランスが計算されていて、I部終了時にはすでにスタンディングオベーションをしている人までいました。後半も圧巻の演奏で、何度も涙を流してしまいました。アンコールだけでも40分ありましたが、会場はオールスタンディングオベーション。音楽のあるべき姿を教えられました。来日コンサートの実現が今からとても楽しみです。

Grimethorpe Colliery Band

Ralph Vaughan Williams Overture from Henry V
Peter Meechan Shine for tuba and brass band (world premiere)
Derek Bourgeois Concerto No 1 Op 44
Dmitri Shostakovich (arr Kitson) Festive Overture
John Golland Aria
Andy Scott My Mountain Top for tuba
Derek Bourgeois The Downfall of Lucifer Op 103
Percy Grainger (arr Wright) Irish Tune from County Derry
Piotr Ilyich Tchaikovsky (arr Ashmore) Finale from Symphony No 4
Howard Evans conductor
Leslie Neish tuba

全体を通して常に力んでしまっているような感じで、曲の表情や色が変わらず、淡泊な音楽という印象が否めませんでした。音のバランスやブレンドなどが良くされるとコントラストが豊かになり音楽のそれぞれの場面での印象が変わると思うのですが・・・。

数年前の名演が耳に残っていて期待していただけに、今回の演奏は私の耳には少々残念な感じに聴こえてしまいました。